

## 学校教育における読書指導の位置づけ — 読書教育に潜むその問題点 —

菊 入 三樹夫

(平成6年9月30日受理)

### Zur Abschätzung der Lesensführung in unserer Schulerziehung — einige Probleme, die sie in sich enthält —

Mikio KIKURI

(Received September 30, 1994)

#### はじめに

読書はこどもの精神形成に重大な影響を与える。とくに児童期・青年期にあつては、感受性や理解度など、こどもの成長や発達課題の達成の面からも、この時期には、詩歌・物語・伝記などの文学や人文分野の読み物ばかりではなく、科学読み物や冒険談など、読んでおくべきものはたいへん多い。だが近年こどもの読書離れの傾向が、各方面から指摘され、これを憂慮する声は教育界のみならず、広範にあがっている。

従来より読書は、精神的に高い価値を保持するものであり、学校教育のみならず人生のあらゆる場に有益なものとして、アブリオリに推奨されてきた。こどもの読書離れが叫ばれる昨今、こどもにいかにか読書の習慣づけがなされるかが、教育実践の重大問題になっている。筆者もこどもの成長に、読書が本来きわめて重要な位置をしめるものであることを認めるものである。読書はこどもの成長にとって、教育的にも優れた内容を有するものであるから、学校教育の場にあつては、読書教育がきわめて重要なものであることに、もとより疑いをはさむものでない。

しかし読書という行為は、実際には多面的な意味をもっている。教育実践の場での読書教育の実践遂行は、単に抽象的な読書の理念のみではなく、読書教育としての具体的な性格をもち、その性格ごとそっくりこどもに付与されることになる。するとここに、読書教育の見過ごされがちな問題があらわれてくることになる。すなわち読書を通じての、そこに盛り込まれた意味内容の受容の如何にということばかりでない。読書という行為と、その教職教養科 教育指導論

スタイルがもっている意味と役割、そして読書を通じて獲得される知識や読書体験が、どんな役割をはたしているか整理してみると、現今の学校教育における読書教育には問題がないわけではない。むしろ学校教育の根幹にふれる問題をはらんでいるといえよう。

かねて見過ごされがちであった読書教育の具体的な性格や問題点を、ここで取り上げて考察することにしたい。

#### 1. 読書の現状

昨今、中学生・高校生の読書離れが憂慮されている。なるほど過日、文部省が発表した全国の児童・生徒の読書にかんする統計を一瞥しても、本を読まなくなっている傾向は顕著である<sup>(1)</sup>。ちなみに大学生にたいする同じような調査<sup>(2)</sup>でも、大学生の読書離れの傾向は顕著にみられる。

なぜ中高生が読書をしなくなったかということについては、いろいろな解釈があるが、おもだったものを上げれば、以下のようなものであろう。まず多く上げられるのは、今日の時代的な特質に根拠を求めるものであり、余暇分野では読書以外に、他のアミューズメント（マンガや雑誌の大量発行、テレビやオーディオ音楽装置の個人所有化、コンピュータ・ゲームのこども世界への浸透など）がたくさん成立し、かつて中高生の余暇時間で主なる位置をしめていた読書が、独占的な地位を失ったというものである。これは注<sup>(3)</sup>のアンケート調査結果にも示されているし、統計的にもはっきりと読みとることができる<sup>(4)</sup>。また小学校高学年生や中学生になると、学習塾や部活動など日々のスケジュールが密になり、結果的に読書に費やす時間が減少している、ということどもをとりまく今日的な状況も作用していよう。

学校教育が読書離れに直接関わっている部分もあることも、忘れてはならない。先の全国学校図書館協会の分析でも、1. 受験勉強や部活動が忙しく、本を読むゆとりがうしなわれているから、という事情とともに、2. 教師も生活指導（生徒指導）などに時間をとられ、読書の大切さを訴える機会が少ない、という理由も挙げている<sup>40</sup>。

こういったこどもをとりまく状況は、おとな社会においても基本的には同様であるから、余暇時間もこどもと同様に、マスメディアを受容することで過ごすおとなは多い。つまりこどもの読書離れを憂いているおとなも、実はまともな読書習慣は持っていないのであり、こどもは日常生活において、身近なおとなから読書文化を継承する機会が、ずっと減少していることも指摘しておかねばなるまい。通勤時におけるポルノグラフィック・スポーツ新聞や芸能ゴシップ週刊誌の氾濫、書籍であっても、ベストセラーの多くはノウハウ関係のものである。実際にはこども達の読書離れと言うよりは、今日のわが国の国民文化のうちで、読書がしめる位置がほとんどわずかなものでしかないというのが現実であり、それがこども達の上にも現れていると見た方がより正確であろう。

こどもの日常生活のルーティーンから、読書という項目がいちじるしく減少し、読書以外の時間の消費方法へと向かったのは、今日の日本社会の特質である社会の情報産業化、大量消費社会に直接的な原因がある。戦後の日本社会は総体的にこの方向を希求して発展してきたのであり、これはかなり実現されてきた。そして必然的な結果的現象としての読書率の低下、読書離れなのである。これを無視して、また既成社会側のいわば「加害責任」を自省せずに、こどもの読書離れを嘆くのでは、何も良い方向へとは向くことはあるまい。

ところで、中学生・高校生のこのような日常生活のルーティーンのなかで、読書の習慣が維持されなくなっているのであるから、読書の習慣の維持、あるいは生み出すことは、学校での教育実践の場でも、家庭の地域社会でも、読書教育の実践方法いかんでは十分に可能である。それはいくつかの実践報告からも納得することができる<sup>41</sup>。

だがまた一方では、おとなの素朴な印象として、「昔の学生（中・高校生を含む）はもっと本を読んだ」という評価（感慨）も同時に根強く存在する。しかしこの評価も、経済高度成長期からの高校進学率の急上昇に見ら

れる、時代的な高校生像（高校生の主体的な自己理解・自己像と周囲の高校生にたいする期待像）の変化を考慮にいれば、学生＝読書のイメージはあきらかに経済の高度成長期以前の高中生像であり、今日の時代的実相とはかなりかけ離れていることが分かるに違いない。

例えば今日の97%以上にも及ぶ高等学校への進学率は、同世代年齢のほぼ高校への全入と見て良いだろう。この高校全入という事態によって、知的に選抜され、知的関心の高いものとしての高校生という、経済高度成長期以前に作り上げられた、そして今も期待像として一般に流通している高校生像のイメージと、現実の高校生ではかけ離れたものになっているのである。今日の同世代間にしめる高校生の割合の極限的膨張は、高校生中の読書指向層（知的関心が能動的なもの、知的な刺激に敏感な層か）の割合を相対的に減少させた。高校全入が高校生そのものを変質させていることも見失ってはならない。

## 2. 学校教育における読書の扱い

学校教育における読書の位置づけは、どのようになっているのだろうか。学校教育での教科指導のいわば「根拠」とも言うべき、「学習指導要領」における国語の指導の「目標」の中に記述された、読書についての箇所を列挙すると次のようである。（下線は筆者による）

小・第1学年「粗筋をつかみながら話を聞いたり、書かれている事柄の大体を理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、易しい読み物を楽しんで読もうとする態度を育てる。」

小・第2学年「事柄の順序を考えながら話を聞いたり、事柄の順序や場面の様子の移り変わりなどに注意しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、易しい読み物を進んで読もうとする意欲を高める。」

小・第3学年「内容の要点を押さえながら話を聞いたり、内容の要点を正しく理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、いろいろな読み物を読もうとする態度を育てる。」

小・第4学年「内容の要点や中心点を正確に押さえながら話を聞いたり、段落相互の関係を考えて中心点を正確に把握しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、読書の範囲を広げるようにする。」

小・第5学年「話し手の意図をつかみながら聞いたり、主題や要旨を理解しながら文章を読んだりすることが

できるようにするとともに、読書を通じて考えを深めるようにする。」

小・第6学年「目的に応じて効果的に話を聞いたり、目的や文章の種類などに応じて正確な読み方で文章を読んだりすることができるようにするとともに、適切な読み物を選んで読む習慣をつける。」

中・第1学年「話や文章の内容を正確に理解する能力を高めるとともに、進んで話を聞き、読書に親しむ態度を育てる。」

中・第2学年「話や文章の内容を正確に理解する能力を高めるとともに、積極的に話を聞き、読書に親しんで自己を豊かにする態度を育てる。」

中・第3学年「目的や場面に応じて話や文章の内容を的確に理解する能力を身に付けさせるとともに、積極的に話を聞き、読書を生活に役立てる態度を育てる。」

高・国語Ⅰ・Ⅱ「国語を的確に理解し適切に表現する能力を養うとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」

また文部省による小学校学習指導要領の解説では<sup>(4)</sup>、それぞれの学年の「国語」の「目標」の解説として、読書について以下のような解説が付されている。「興味のある読み物をできるだけ多く用意して、あらゆる場で適切な読書への意欲付けをすることが大切である」第1学年<sup>(7)</sup>。「読書に対する意欲付けや態度を育てる指導が肝要である」第2学年<sup>(8)</sup>。「この指導に当たっては、様々な種類の読み物を選んで読ませるようにし、読書の範囲を広げていくようにさせることが大切である。」第3学年<sup>(9)</sup>。「読書の範囲を広げ、量的な増加を図るような指導をすることが必要である」第4学年<sup>(10)</sup>。「このことは、読書を通じて思考力や想像力を培うことにもなる」第5学年<sup>(11)</sup>。「よい読書習慣を身に付けさせるよう計画的に指導することが必要である」第6学年<sup>(12)</sup>、というように読書の意義を表現している。

一方、中学校の指導要領の解説<sup>(13)</sup>においても、各学年の「目標」の解説として、次のように読書を位置づけている。「第1学年では、基礎的・基本的な態度を育てることに重点が置かれている。理解するための態度は、進んで話を聞き、読書に親しむことが重要な基盤となる」<sup>(14)</sup>。「第2学年では……読書によって自己を豊かにする態度の育成が重点になっている。これは、読書生活を充実させ、必要な情報を適切に収集し、また優れた

文化の持つ価値を吸収して……」<sup>(15)</sup>。「第3学年では、……読書を生活に役立てるとは、教養を身に付けるために読書し、人間形成を図るとともに、……」<sup>(16)</sup>とある。

同様に高等学校の学習指導要領の解説<sup>(17)</sup>においても、読書の重要性を強調しているが、ここでの読書観の特質についていくつかの記述を、取り上げて解釈すると次のようになろう。たとえば当書の国語Ⅰ・Ⅱ内容のB理解の解説には以下のような記述がある。「読解指導に加えて読書指導を重視し、読書力の育成を図ることも（学習指導要領国語篇には）明確に示されている。マスメディアの発達に伴い情報手段の多様化が進行する中で、高校生読書量はますます減少傾向にある。こうした状況の中でこそ、読書の充実したものとなるよう指導することが必要なのである」（括弧部は筆者補足）<sup>(18)</sup>。この記述によれば、情報手段の発達がこどもの読書量を減少させたこと、また多様な情報手段の中で、読書は他よりも高い意義をもつものとしていることは明瞭である。

だがこの解説は双方ともはたして妥当といえようか。この記述がいうように、読書量の減少は他の情報手段の多様化によるものと、その原因を求めるだけでよいのか。学校教育が指導する読書指導のものにも、読書離れをきたす問題は含まれていないのか。また、読書の意義と楽しさは、他の情報手段の意義や楽しさよりも次元的に高いものなのだろうか。この記述には冷静な理性探求的・懐疑的な姿勢があまり見うけられない。

また、国語Ⅰ・Ⅲ内容の取扱いの(3)のオでは、「読書力を伸ばし、読書の習慣を養うこと。」とあるが、これにたいする解説は以下のようになっている。「ここで言う『読書力』とは、読書に対して興味・関心をもち、自ら進んで読書しようとする力のことである。さらに、書物を自分の力で読み通し、その中から自分にとって必要なものを取り出して、それを活用する力のことでもある。このような読書力を伸ばし、読書に対する興味・関心を喚起することが、読書指導においては重要なのである。生徒が読書を好むようになり、自然に読書の習慣が身に付くように指導することが大切である」<sup>(19)</sup>、とある。

だが、先の場合と同様に、なぜ「自分にとって必要なもの」をおもに書物の中だけに限ろうとするのであろうか。日常の賢明な生活（日常知の獲得や習得と運用）のためには、より広範なメディアからの活用が重要なのである。そのために多様なメディアが発達しているのである。するとここでは、書籍にある知を「活用する」こと

が読書力としてはいるが、他のメディアの活用する知を念頭に入れていないことから、この記述から読みとることのできる読書とは、「活用する」ことにはなく、「読書を好むようになり、自然に読書の習慣が身に付く」ことに、おもな（隠れた）目的がおかれているとの解釈も可能になってくる。

また『現代文』の2「目標」では、「近代以降の優れた文章や作品を読解し鑑賞する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで表現し読書することによって人生を豊かにする態度を育てる」とある。これも読書にたいする無疑念の価値づけが前提となっていることも、同様に明瞭である。その解説として当面は、「近代以降の優れた文章や作品の読解や鑑賞を通して自己の内面が豊かになっていくことを自覚させ、読書がどれほど人生を充実させ、自己を形成していく上で欠かすことのできない糧でもあるかを理解させることが大切である。そのためにも、生徒が自ら積極的に読書する意欲といっそう確かな読書態度を身に付けることができるよう指導する必要がある。それが、生涯にわたって読書し、人生を豊かにする態度に育成につながるのである」<sup>(20)</sup>、とある。読書の意味づけが極めてはっきりとなされているが、同時に十九世紀的教養主義、ペダントシズム、小市民主義的な生活意識がたいへん強いものになっていることも、同様にうかがうことができる。（次項で詳論）

ところで従来の読書教育は、道学的な性格も一方で保持していた。学校の授業などで要求される読書感想文などにおいては、この本を読むことで、いかに精神的に豊かになったかを告白し、より前向きに生きて行く決意を書くというのが、ひとつのパターンでもあった。そこには読書をありがたがり、自己の実践倫理に結びつける巧みな偽善性が貫かれていた（教訓・感動主義の読書）。

また、読書を勧める層（学校教師が多い）は、読書は人間の内面性を豊かにするというが、その半面、読書知のはたしてきた排他的な役割（次項で詳論）について、多くは無感覚であることが多い。読書教育を通した「真面目さ」の形成のみが強調されがちである。読書のすすめがすなわち、読書のすばらしさや感動の体験と「真面目さ」の訓育に主眼がおかれる場合、そこに隠れた読書の作用が浮かび上がってくる。この問題こそ、今日のわれわれが作り上げてきた、学校教育の知の枠組みの閉鎖的・排他的性格と深く関わっているものである。次項で

その意味を考えてみたい。

### 3. 読書の意味とその相対化

#### 3-1 活字メディアの位置づけ

活字、イラストレーション、スライド、ビデオなどの視覚・映像メディア、また別にテープやラジオなどの聴覚メディアなど、情報を伝達するメディアは今日多様であり、マルチ・メディアの時代の到来が叫ばれている今日である。しかし学校教育の時空にあっては、活字は他と同列の単なるメディアとしてではなく、学校教育において追求されるべき教育知そのものの地位を占めており、他のメディアは、あくまでも学校知<sup>(21)</sup>である活字知を補完するものとして位置づけられると言えよう。そして活字知のうちでもっとも高位置にオーソライズされたものとして読書知がある。

学校知にあっては活字は他のメディアから、いわば「聖別」されたものとして君臨している。活字以外は通常、利用すべき手段としてのリテラシーの次元に留まる、あくまでもメディアとしての扱いにおかれるのである。それにひきかえ活字は、単なるリテラシーとしてではなく、価値を有する文化として現れる。他のメディアによる知は、学校知を頂点とする知のヒエラルキーの下位文化を形成することになる<sup>(22)</sup>。

しかし学校という場を離れば、おおいに魅力や可能性を秘めたメディアとして、活字外の他種のメディアはこどもたちに受け入れられており、また先進的な教育実践の試みでも、活字外のメディアは多に活用されるようになった。ここにわれわれは、教育知と学校知との乖離を見ることができる。今日の時代的な要請としても、教育知が幅広く多面的になってきていることから、多種のメディアが必要となり、現にそれが現に教育知の中に取り入れられるようになってきている。しかしオーソドックスな学校知は、依然として活字によるものである。

これは、たんに活字がメディアとして教育知に伝統的に深くコミットしていた、活字知と学校知および教育知があらかた重複していたという過去の状況ばかりによるのではない。社会知にたいする教育知のオーソドックス化、そして学歴社会の進行のなかでの学校教育の社会的な優位化による、学校知のオーソリティ化と密接に関わっているのである。

読書・活字知を擁護する立場の多くは、次のような考え方からくることが多い。読書・活字知と映像・音響知

との相違を比較した場合、前者では情報を得ようとする主体が、対象である書籍類の内容にたいして、一定程度の距離、客観性を保持することができる。また同時に受容にあたっては、主体の生理速度や理解速度においてなすことができる。すなわち、総体的には主体的な自由を保持することができるというのである。しかし、映像・音響知にあっては、情報を得ようとする主体は、情報製作者（情報供給側、多くは企業的に企画・製作される）の生理的速度や演出目的に吸収され、そこでは情報を受ける側の主体性は保持されず、理解速度を供給側に委ねることになる。そのうえ、映像・音響知の伝達・受容には情緒性がそもそも重要な構成要因となっている。それゆえ知の枠組みそれ自体が、主観的、情緒的な性格を強く帯びている、という特色があるので、情報受容者はその意識ごと、情報供給側のもつパラダイムに取り込まれてしまい、主客間に必要な理性的距離は失われてしまう。今日まさにこのことが、戦略的に使用されやすい状況にあり、これこそ警戒しなければならないというのであろう。そうであれば、これについては妥当であると言えよう。

### 3-2 学校における公認文化と下位文化

それにもかかわらず今一方では、映像や音響を駆使した学校教材の開発はきわめて盛んに行われている。教育実践の場にあつては、教育用メディアが多面的になっていき、よりヴィヴィッドに知の伝達ができるようになってきた。それとともに幅広く知の伝達において、メディアとしての活字の占める割合は、相対的に低下してきている。こういったなかで、活字による知の伝達である読書のみを他のメディアによる知の伝達から切り離して（聖別して）、高価値化することは、教育知の伝達総体の視野から見れば、これは矛盾をはらんだ一貫性のないあり方と言わざるをえまい。

もとより漫画や雑誌などは「アミューズメント」として、学校の公式文化のなかで、下位文化を形成している。これらのメディアの学校という場からの排除は、読書などの公認文化の推賞と表裏一体の関係にある。すなわち読書・活字メディアは、他のメディアにたいして優越するものとして扱われるのである。

学校知を擁護する側の、いっぽうで読書を他の「アミューズメント」とは異なる、学校における公認文化として価値づけ、他の「アミューズメント」を下位文化としてそ

れらから峻別しながら、他方では他の「アミューズメント」と読書を同列に比較して、読書量の少なさや読書に親しむ意欲の薄さに慨嘆する態度には、かなりの論理的な混乱があると言わねばなるまい。

だがことはそんなに単純ではない。今日の出版状況では、マンガや娯楽雑誌など、「正統的」な読書以外のための出版物が無数に出版されて、隆盛を極めている。こういったなかで、たとえば今日のマンガを、マンガという形態のみから、ひとつの categorie に分類することは、いささか乱暴な決めつけといわねばなるまい。かつて特有の人間関係や精神世界を描き、女子中・高生がおもな読書層であった、いわゆる「少女小説」のテリトリーを、今日では完全に「少女コミック」という分野がとって代わっている。この分野が保持する精神性とそのレベルは、かつての「少女小説」にならひけをとるものではなく、むしろ「少女小説」よりも広範で内省的な世界を描いて、成功しているものも多い。また学校知的な感動をもたらす古典的名作マンガである『はだしのゲン』（作・中沢啓治）や出版各社が競作している歴史シリーズなどは、学校によりおおいに推薦されている。

これらのことから分かるのは、学校教育における読書の勤めは、実は活字文化の枠組みそれ自体に、こどもの知的可能性をなじませることにあるのではなく、学校知になじませることにあるということである。学校知は多くは活字メディアを通じて伝授されるが、マンガという形式をとる場合も、また映像という形式（文部省推薦、日本PTA全国協議会推薦などという映画がある）の場合もありうるのである。この学校知は大方の場合、読書として伝達される活字知と、一般には重複するものであるように捉えられている。だから読書が、学校教育の場にあつては推奨されるのである。それゆえ読書であっても、学校知と相容れない実質を持つものは当然排除されることになるのである（学校教科書には取り上げられない作品や作家は数多い）。

厳密には学校教育にあつては、活字知やそれへの習慣づけがなされるのではなく、おもに活字知を通じての学校知の受容の訓練がなされていると見るべきであろう。同様に、活字知もその一部である、活字文化・出版文化も学校知に反しない限りにおいて、学校教育はそれを推薦することになるし、また出版文化もその一部である映像・聴取メディアも同様に推薦されることになる。ここで問題にされなければならないのは、学校知以外の知

の形態の、学校知による低序列化、無価値化と排除ということである。

### 3-3 読書のはたしてきた役割

前項の学校知とは読書を推奨するものである。どれほど上級学校に在籍したかを指標に人々を分断する、いわゆる学歴主義も、視点を変えれば、どれほど学校体験をしたかということによる人々の分類であるともいえる。学校体験の長さが学校知にどれだけ適応したかを表現する指標であれば、読書体験の多寡もそれぞれの人の精神性にどれほど影響を与え、豊かにしたといった個人的なレベルに留まらない作用をはたすことになる。

読書によってもたらされる知である読書知それ自体と、読書知のスタイルは、人々をいわば「読書内存在」と「読書外存在」とに分断する。学校体験での読書は、人を「読書内存在」として社会的に優越するものとして位置づける。学歴制度がそうであるように、読書は特権の条件としての知、知の階層性の指標としての役割をはたすことになる。

ところで近代社会にあっては、知は階級的な成功のための有力な武器でもあった。この知を、人はそれぞれの学校知体験の長さや、どんな学校で知を体験したかによって、他言すれば近代学校教育制度というヒエラルキー尺度のうえに位置づけて、近代社会の権力ヒエラルキーの中に、それぞれ相応の高さのところへと位置づけたのである。こうすることで、知のなかでも学校知は、旧時代の身分による位置づけに代わって、近代社会秩序の指標として、きわめて有用なものとして重宝され、結果的にオーソライズされることになったのである。

読書のおもな内容である文学作品とても同様の役割をはたした。文芸にふれること、文芸にいかに向き合うかといった作法は、多くは学校という場を通じて伝達された。文芸に親炙しそれに感動するといった個人の内面的なことがらまでも、学校制度のなかでオーソライズされた。読書知を保持しているものが、社会的に優越するようになると、その優越性は外面的には学歴やその結果としての高い社会的地位で、精神的には学校知の雰囲気やどれだけ体得しているか、すなわちどれほどの読書知を身につけているかということで、自他に明示することになる。こうして読書知は階級性・閉鎖性を持つことになった<sup>(25)</sup>。

このような読書知の使用例の最も閉鎖的、階級的な典

型は「ドイツ教養主義」とよばれる十九世紀から二十世紀初頭にかけての、後発の近代国家制度の中で醸成されたひとつの思潮であろう<sup>(26)</sup>。これをささえたドイツの学校制度を近代日本はほぼそのまま取り入れたので、当時の日本の実状に見合っただけで変形した「教養主義」が、日本社会にも出現することになったのである。幣衣のポケットにレクラム文庫の哲学書を忍ばせる旧制高校生、むやみに人生などに想いをいたす青白い文学青年といった姿は、この典型的なカリキュラムにすぎない。これほど学校知、読書知を外見的なスタイルとして、社会的な地位として誇示した例は、他にそう見られるものではない。

だがこのカリキュラムは同時に、学校知が社会有用な実際性よりも、あまりプラクティカルとはいえない、古典的人間主義と重要な関係を保持することになったとも示している。学校における活字知の主流は、古典的教養主義的な色彩のものとなった。今日の学校教育においても、基本的にはあまり変化してはいない（それは高校用国語教科書にもっとも多く掲載される作品の上位二位が、『こゝろ』、それから『名月記』の順になっていることから、了解しうるものである）。

### 3-4 学校知とかくれたカリキュラム

学校教育におけるカリキュラムとは学校知を体系的に示したものであるから、このカリキュラムの選定は、なにがしかの意識統制・価値統制の側面を持つことになる。すなわち、イデオロギー統制である。カリキュラムの選定と学校教育の基準として遵守させることによって、具体的に維持されるのは、現実社会の絶対的な優位性と、それをこどもが認めて学校知を受容し、学校知の背景をなす現実社会に適應する、その訓練の場としての学校とこどもの関係を維持することにある。

国語・数学・理科といった、学校教育のカリキュラムに規定されたそれぞれの教科は、それぞれが全体性・一貫性をもつゆるぎない世界を確立しているのだから、こどもはこれらの世界に適應し、受容していくことしかできず、絶対的に受動的・客体的な立場に立たされる。読書教育においても事情は同様である。読書の世界は圧倒的に強大な教養・知識・学問体系などを誇示し、読書を構成する秩序の不可侵性でこどもを圧倒することになる。

これは国語における古典や、音楽におけるクラシック（まさに古典である）音楽の鑑賞において、とりわけ顕著である。また古典やクラシック音楽の素養は、平均的

一般からの文化意識の差異を自覚させる役割をはたしている。古典の読書や講読のかくれた役割は、まさにここにあると考えられる。古典の教育はクラシック音楽の鑑賞の教育と同様に、その無益さ（社会知・日常知とかけ離れていること）が「教養」の語に置き換えられ、この「教養」のパラダイムのもつ作用（人間間の上下的差異による序列化）が隠べいされて維持されているのである。「教養」の主要である読書の場合もまったく同様に、その行為自体が目的化され、読書は絶対的な価値を獲得して、また学校知によって推奨されるという循環が作られるのである。

このように学校知は、日常知とも乖離して次元を別にし、それ自体の充足が自己目的化していく。日常生活になんの役にも立たない知であるからこそ、その獲得量の多寡が社会的な優劣の尺度に使用され、その役に立たなさによってこそ偶像化、物神化して行くことになったともいえよう。

確立した学校知の観念の固定性、抑圧性は、広範な可能性を持つ知の発展のためには、相対化される必要があるのは当然である。ここで学校教育の持つ、強力な「かくれたカリキュラム」<sup>(25)</sup>の拘束性を問題にすることが必要になるのである。

明示されたカリキュラムがハードな様相で、いわば契約的に学校知の消化をはたさせることで、子どもを社会秩序に取り込むものであるならば、かくれたカリキュラムはソフトに、無意識のもとにこの秩序の受容を達成させる役割を担っている。このかくれたカリキュラムは通常、クラス活動や部活動、学校行事といった特別活動や、「われわれ」意識・仲間意識にみられるような共同体型の学校観の喚養などに顕著で、共通の規範や価値などが子ども一人一人の内面に徐々になじみ、蓄積されることになる。

ここでこのような両カリキュラムの、それぞれ異なる役割をつなぐ接点の役割を担うのが、学校教育における読書の役割でもある。読書は「冷たい」学校知の体系と「暖かい」内面的な精神性をつなぎ、活性化させることに役だっているからである。

#### おわりに

読書以外の他のメディアを教育実践の場において、読書と同様の位置に置くこと、これには本論で扱った以外に、教科書やノート、黒板による一斉授業といった、日

本の学校のどこにでも見られる、権威としての学校知を伝授する（まさに「授業」である）という、今日の学校教育の枠組みをつき崩す契機があると思われる。また読書を道学的な学校知から解放し、読書を映画やゲームなどと同様に、「面白い」から読書するという形へと転換する必要があるだろう。

同様に、勉強が面白いものであるために、学校知の体系をもつき崩し、新たな教育知の創造をすることが、今日の学校教育は迫られているといえよう。今日の学校知は、既成の価値体系への絶対的適応をせまるものであるから、当然のこととして、こどもの広範な創造性を養成するものにはならず、それゆえより広範な文化の発展に寄与することもあまりないからである。

さて、われわれの日常生活においても、多種多様なメディアが存在している。今日では映像や音声といった個別のメディアの使用法ではなく、これらを複合したり、コンピュータで制御させたりするようになっている。われわれをとりまくメディアは、すべてが複合されて「高精細度」<sup>(26)</sup>の「熱いメディア」<sup>(27)</sup>へと変換しつつある。これら短期間のうちに圧倒的な能力でわれわれの世界に侵入してきた新たなメディアは、われわれの生活様式を大きく変えてしまうだろう。

学校教育にあっても、教育知の伝達にあってはキーセッションを設けて、電話回線や光通信、また人工衛星を中継して直接に生徒に伝達する試みもなされ、すでに一部では現実化している。学校教育用のメディアは今後、より広範により深い密度で活用され、学校教育はより効率的でより能率の高いものになって行くだろう。だが同時にこの新たなメディアは、活字にくらべ効率がきわめて良く、またおおいに魅力的であるからこそ、人々はそのメディアにたいする主体性の保持がいつそう困難になってくる。

それぞれのメディアには、各々のその特長と欠点など、独自の特性を備えている。小論で論じたように、もっとも古典的でオーソライズされている読書・活字メディアは、その特性を充分に対象化し、批判的評価にさらす必要がある。同時に、それ以外の教育メディア、それに学校教育に新たに参入してきた新たな教育メディアについても、同様に充分な対象化と批判がなされなければなるまい。だがこれらの新たなメディアは、私たちの思考力を大きく上まわる速度で私たちの世界に定着してきている。だからこそ、学校教育がこれらの新メディアの特性

にからめ捕られ、これらの枠組みの内側でのみ可能であるというふうに、学校教育が狭められぬよう、その対象化と批判をかさね、有用な教育手段としての了解を早急にはたさなければならないと考えている。

注 解

(1) 文部省発表の『読書に関する調査』(1994・8・2)は、新聞各紙がこの要点を報じた(94・8・3)が、毎日新聞によれば以下の通りである。中・高各2年生の7割は「本が好き」と答えているが、半面、1カ月間にまったく本を読まなかった生徒は4割もいた。良く読むのは漫画や雑誌で、帰宅後の楽しみは、「テレビや音楽」が圧倒的である。これは同省が全国学校図書館協議会に委託して行った初めての調査であり、全国の小学3・5年生、中学2年生、高校2年生の計6400人と教員・保護者の各4千人を対象に、94年2月一か月間の読書量を調べたものである。

小学生は一か月平均8冊の読書であり、小3女子では48.3%が10冊以上読んでいた。中高生の平均は2冊である。まったく本を読まなかったのは、小学生で8.1%、中学生で44%、高校生で40.5%となっている。漫画(単行本)は中学生では一か月平均11冊、高校生8冊だった。また帰宅後の活動は、小学生では宿題・勉強58.5%、テレビ51%、漫画35.1%の順で、中・高校生ではテレビが70%だった。

(2) 毎日新聞夕刊の記事「キャンバル」(94・7・1)によれば、15大学83人の調査で、1か月に1～2冊の者が34%、6～9冊が28%、3～5冊が24%、読まないと答えた者が10%、10冊以上読書した者は3%、その他(3か月に1冊の読書)が1%であった。

(3) 『世界の青年との比較からみた日本の青年—第5回世界青年意識調査報告書—』(総務庁青少年対策本部編、1994)の「余暇をどのように過ごすか」の質問では、読書は36.8%で第3位、1位はテレビで59.1%、2位はショッピングで、45.0%であり、この順位は第2回の調査より、変化はない。

また「休日の過ごし方」では、友人と(64.2%)テレビ(59.1%)ショッピング(45.0%)読書(36.8%)特になにもせずに(30.9%)の順である。

(4) 朝日新聞 1994・8・3

(5) 『ジュ・パンス<教師版>』・高文研・1993・4・「高校生たちを本好きに変えた—学校ぐるみの読書運

動」(P.22)。また、同『ジュ・パンス<教師版>』・1994・4・「朝の読書が奇跡を生んだ、その後」(P.18)には、千葉県私立船橋学園女子高等学校における毎朝の「朝の読書の時間」の実践報告があり、学校での一日のはじめに10～15分の読書タイムを全校的に設け、生徒の読書の習慣づけに成功したとある。詳細については『朝の読書が奇跡を生んだ』(高文研・1993)を参照。また『ジュ・パンス<教師版>』・1994・5・「予想外の収穫『黙読の時間』」P.26では、宮城県立大河原商業教諭(前船岡養護学校教諭)高橋美恵子氏の実践例がある。

(6) 『小学校指導書国語編・平成元年6月』・文部省・株式会社ぎょうせい・1989

(7) 同 P.17

(8) 同 P.31

(9) 同 P.44

(10) 同 P.60

(11) 同 P.77

(12) 同 P.94

(13) 『中学校指導書国語編・平成元年7月』・文部省・東京書籍株式会社・1989

(14) 同 P.17

(15) 同上

(16) 同上

(17) 『高等学校学習指導要領解説国語編・平成元年12月』・文部省・教育出版株式会社・1989

(18) 同 P.31

(19) 同 P.50

(20) 同 P.76

(21) 教育知 (education knowledge) 学校知 (school knowledge) の語は、あまり区別なしに使用されることがある。しかし小論においては、教育知に対する語として使用する。それは学校において伝達される知は、学校という場、学校教育という共通のパラダイムの下でしか機能しないものと見るからである。近代知が分化し、未知を探求する理性知から既成秩序の中に自己を位置づける学校知へと、知は袋小路に陥り、主体であるべき人間を分断固定化し、圧迫していく、知の自己疎外状況がここに見られる。

(22) 『メディア論』(M・マクルーハン・みすず書房・1987)の「18印刷されたことば」(p.175)には次の記述がある。「心理的に見れば、印刷本は視覚機能の

- 拡張したものであるから、遠近法と固定した視点を強化することになった。視点を消失点とを強調すると、そこに遠近法の幻覚ができあがる。……社会的に見ると、活字印刷という形をとった人間の拡張は、国家主義、産業主義、マス社会、識字と教育の普及というものをもたらした。なぜなら、印刷は正確に反復可能なイメージを提供し、それが社会的エネルギーを拡張させる、まったく新しい形態を刺激したからであった。」
- (23) 『メディア論』の「18印刷されたことば」(p.176)には次の記述がある。「活字印刷が人間に与えた贈り物である能力のなかでもっとも意義のあるものが、非密着性(detachment)と非関与性(noninvolvement) —すなわち、反応なしに行動する力であろう。……『公平無私の』(disinterested)ということばは、活字人間の崇高な非密着性と倫理的高潔性を表明するものであったが、その同じことばが、過去10年ほどに「知ったことではない」(couldn't care less) という意味でますます使われるようになってきた。「公平無私の」ということばは、文字をもった文明社会の科学的で学問的な気質を示すものとして誠実性を意味していたが、その同じことばが、知性と感性の専門化および断片化を意味するとして、いま、ますます拒否されるようになっていく。」
- (24) 『軍服を着る市民たち』・望田幸男・有斐閣・1983  
 『ドイツ・ギムナジウム200年史』・M・クラウル・ミネルヴァ書房・1986  
 『教養市民層からナチズムへ』・野田宣雄・名古屋大学出版会・1988  
 『読書人の没落』・F.K.E リンガー・名古屋大学出版会・1991などに詳しい。
- (25) かくれたカリキュラム (hidden curriculum) とは、「主として学校において表だっては語られることなく、暗黙の了解のもとで潜在的に教師から生徒へ伝達されるところの規範、価値、信念の体系」(『教育社会学』・柴野昌山他・有斐閣・1992・P.61) との記述があるが、この用法にならった。また「イデオロギーとしてのかくれたカリキュラム」(同 P.62) の項には、「……ホールズは……学校は潜在的なカリキュラムを通して階級分化の注入と分業体制の再生産に寄与している。…イリイチは、学校における抑圧的儀礼そのものを潜在的カリキュラムと呼び、そのイデオロ

ギーとしての支配装置を批判している」との記述もある。他に『脱学校の社会』(I. イリッチ・東京創元社・1977)P.70・「潜在のカリキュラム」についての記述を参照のこと。

(26) 『メディア論』P.23

(27) 同 P.23~34, マクルーハンの『メディア論』は今日ではすでに古典であり、現象として妥当するものといえよう。しかしこの論は、古典的な「理性的人間」にたいする信頼を前提にしており、古典・教養知の立場から発言している。また、『メディア論』が執筆されて、すでに三十年が経過している。当時は存在せず、今日では一般化したメディアや複合メディアもかなり導入された。私たちと私たちを取りまくメディアの関係は、当時の状況とはかなりかけ離れたものになっている。

#### Zusammenfassung

Das Lesen ist der Geistesgestaltung des Menschen unentbehrlich, und Jungen lernen in der Schule Lesen und seine Gewohnheit. Unser Kultusministerium veröffentlicht auch für Lehrer viele Bücher, in denen es auf die Wichtigkeit der Lesensführung hinweist. Man verliert aber heute bei uns die Lesensgewohnheit, besonders in der Welt des Jungen. Man glaubt im allgemeinen daran, daß die Verbreitung verschiedener Medien, besonders die Entwicklung der Medien für Unterhaltungen, den Jungen ihre Lesensgewohnheit entzieht.

Die Lesensführung enthält in sich bisher in der japanischen Schulerziehung einige Probleme. Ich nenne Eines der Probleme >das Lesen für Rühren und Belehren<. In solcher Führung fordert ein Lehrer beim Lesen Rühren und Belehren von seinen Schülern. Die Schüler freuen sich am Lesen selbst nicht, sondern sie müssen in Büchern etwas wichtiges suchen. Diese Haltung entzieht den Jungen die Herrlichkeit des Lesens selbst. Das ist eine Ursache des Lesenhasses der Jungen, sie kann man in der solchen Lesensführung der Schule finden. Die Schulerziehung selbst erzeugt den Lesenhaß.

In der modernen Gesellschaft macht das Lesen

nicht nur den Menschegeist herrlich, sondern es auch unterwirft ihn dem System des Letterwissens, das eine eigenartige Struktur hat und uns als eine Autorität erscheint. Das Letterwissen schätzt in seiner eigenen Ordnung das Menschenwissen. Das Wissen wird vom Letterwissen befestigt, und unser Intellekt wird auch davon in der Wissenshierarchie bestimmt. Man muß ruhig den Charakter des Letterwissenes urteilen und von der Beschränkung des Letterwissens unseren Intellekt emanzipieren.

Viele neue Medien schließt uns heute mit einem überwältigenden Einfluß ein. Man muß auch solche neue Medien ruhig urteilen; ihre Charaktere, ihre Einflüsse u. s. w.. Sonst soll der Mensch die Subjektivität noch verlassen, und soll sich die Situation der Wissensselbstentfremdung immer mehr vergrößern, indem er fetischistisch neue Medien respektieren. Fetischistisch zu respektieren, das kann man im umgekehrten Zusammenhang zwischen Mensch und Letter in der modernen Gesellschaft finden.